The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	知恵という徳は何を教えるか : 後期ニーチェ思想の道徳批判と徳倫理学
Author(s)	生島, 弘子
Citation	メタフュシカ. 2021, 52, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85558
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

知恵という徳は何を教えるか
ー後期ニーチェ思想の道徳批判と徳倫理学ー

生島弘子

はじめに　ニーチェの道徳批判と学問批判

ニーチェは彼の時代の、彼の社会の、つまり彼自身の道徳を批判する。そしてその道徳批判は学問批判へと接続される。彼の時代と社会の（ひいては我々の）近代科学が有する真理追求の衝動はキリスト教のもとでこそ育まれたと、彼は考える。そこには神的な真理への、その至高の価値への信仰があるとされる。

道徳を批判しながらニーチェは学問・科学をも批判する。現にある道徳とは異なる類型の道徳が可能であることを示し、そして、現にある学問・科学・真理探究とは異なる仕方でなされる哲学が可能ではないかと語る。彼の思い描く未来の哲学とはどのようなものだろうか。知恵への愛・知恵との愛であるような哲学とは。

本稿はフィリッパ・フットによるニーチェ批判を手掛かりに、徳としての知恵・知恵という徳という側面から、未来の哲学のあり方を探る糸口としたい。ニーチェの道徳批判には明らかに徳倫理学的な側面がある。徳倫理学の議論はニーチェ思想の理解にどのようなものを齎すだろうか。

以下、まず後期ニーチェ思想で展開される道徳批判を概観し、次にフットのニーチェ批判を検討する。そして最後に両者の類似と相違について考察する[1]。

---

[1] ニーチェの著作からの引用は次の全集に拠った。
Nietzsche, Friedrich: *Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe*, hrsg. v. G. Colli und M. Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, Berlin/New York, 1988.（KSA と略記）
引用箇所は以下の書名の略記と章及び節番号、KSA の頁数の併記によって示す。原語の正書法はそのままとする。また原文中の隔字体による強調や改行、ダッシュは省略する。邦訳はちくま学芸文庫、岩波文庫及び白水社のものを参照した。
Z: *Also sprach Zarathustra*
JGB: *Jenseits von Gut und Böse*
GM: *Zur Genealogie der Moral*
フットの著作からの引用は次のものに拠り、頁数を示す。邦訳は次のものを参照した。
Foot, Philippa: *Natural Goodness*, Clarendon Press, 2003.
フィリッパ・フット著、高橋久一郎監訳、河田健太郎、立花幸司、壁谷彰慶訳、『人間にとって善とは何か　徳倫理学入門』、筑摩書房、2014 年。

1　人間の身体としての道徳

道徳批判はニーチェにとって、その全生涯を通して常に重要な課題であったが、後期思想におけるその議論は、道徳を人間の生存条件を示すものとして、つまり身体として、捉え分析するという方法による。このような自らの方法をニーチェは系譜学と称した。

ニーチェは道徳を、それへの服従によって人間の現実の、実際の生が可能になるものであり、それぞれの人間集団がどのような条件のもとで生きながらえてきたかを示すものであるとする。我々人類の歴史を振返り、ただ一つの道徳があるのではなく、様々な道徳があったことを、今我々が道徳を道徳一般として、ただ一つの道徳を考えることがもっぱらであるとしても、別の道徳も可能であることを示そうとする[2]。それぞれの道徳には、それをもつ人々がどのように生きてきたか、生きねばならなかったかが表れるとされる。

> 或る人間の価値評価はその人の魂の構造について何事かを漏らしている、その魂がその生の条件（Lebensbedingung）[3]を、本質的な必要を何処に見ているのかを窺わせるのだ。（JGB 9.268, KSA5 S.222）

『善悪の彼岸』や『道徳の系譜』で語られる貴族道徳と奴隷道徳の対比はよく知られているが、これら道徳の類型の別はそれによって生きる人間の類型の別を示している。固有の道徳をもつ人々の間でどのような性格や行為が徳と、優れたものと、高い価値があると見なされているか。そこには彼らが何によって生きてきたか、繁栄するに至ったかが示されており、彼らの来歴が反映されているとされる。必然的に、或る民族の徳は他の民族の徳と同じ内実のものではなく、それぞれの徳は彼ら自身のものである。そのような徳について、ニーチェはこのように述べる。

> 或る種類が生起し、或る類型（Typus）が確固として強いものになるのは本質的に同じ不都合な諸条件との長期的な戦いのもとでである。（略）古代ギリシアのポリスやヴェニスのような貴族的共同体、（略）そのような種類の者たちはそれとして自らを保持する必要がある。（略）極めて多様な経験が彼らに教えるのは、あらゆる神々や人間に抗し尚も生きながらえ、その上に常に勝利して来たことを、彼らは特にどの性質に負っているかである。この諸性質をこの種の人々は徳（Tugend）と呼び、もっぱらこれらの徳を大きく訓育するのだ。（JGB 9.262, KSA5 S.214f.）

ニーチェは道徳を、古代のものであれキリスト教という道徳であれ、またいずれの類型であれ、人間の生と関わるものとして、人間集団に現実の生存を可能にさせるものとして、捉えている。

---

[2] 「道徳の博物誌（Naturgeschichte）のために」とは『善悪の彼岸』で道徳を主題的に取り扱う章の章題であり、また、『道徳の系譜』では道徳的価値を表す「善いと悪い（Gut und Böse）」、「よいとわるい（Gut und Schlecht）」という語が、語源学的に分析される。

[3] Lebens- und Wachsthums-Bedingung（JGB 5.188, KSA5 S.110）や「実存条件（Existenzbedingung）」（GM I.10, KSA5 S.273）などの語でも表される。

その際に考えられている生とは、権力への意志としての生である。

> 生そのものは本質において、他者や弱者を我がものとすること、侵害すること、圧服することであり、抑圧すること、厳格なることであり、自己自身の形式を他に押し付けること、摂取同化すること、少なくともごく穏やかに言っても搾取することである。（略）生こそは権力への意志（Wille zur Macht）である。（JGB 9.259, KSA5 S.207f.）

このように描かれる生は、例えば人間以外の動物たちの世界として思い描かれるようなものであり、いわば野生・野蛮状態での命を賭した死闘である。個々の動物、大きなものから小さなものに至るまでの様々な生物、集団としてのそれら、微視的には細胞のレベルで、それら全ての活動や作用、関係を、生として、権力への意志として、類比的に捉え、ニーチェは描く。

そして、このような生が展開する、身体（Leib）とはその場である。ニーチェ思想における身体概念は注意しておく必要がある。それは決して日常的な意味での身体のみを、例えば一人の人間や一匹の猫、なんらかの生物個体の手や足や目や耳などの集合、臓器や神経等々の諸組織・諸器官の総合としての、空間的に存在する物体としての身体のみを、意味するのではない。そのようないわゆる身体はその一部に過ぎない。ニーチェの独特の身体概念は権力への意志という根本概念から捉えられる必要がある。つまり、身体とは権力への意志としての生の具体化であり、いわば生の形である。全てこの世の生けるものは身体において、身体によって生きている。道徳が人間の生存条件を示すものであり、人々は彼ら固有の道徳によって生きているとは、道徳を彼らの身体として捉えることができるということである[4]。

我々がそのもとで生きている様々な制度や慣習や文化、また学問や思想なども、我々の身体をなすものと言えるのだ。というのも、そういったものによってこそ我々は生きているものとしての自らを体験できるからである。例えば、日本語で知り、考え、語り、日本語で生きる者には、この特定の言語は身体の一部であり、その人が世界に触れる舌なのだ。数学を習得すれば我々は世界を数学的に捉えることができ、その時数学は我々の目になっている。ニーチェ主義者はニーチェ的な諸概念によって世界を捉える、そのような時、ニーチェ思想はそのような人々の目である。身体という語をこのような広い意味で捉えるからこそ、ニーチェは自らの道徳批判やその方法としての系譜学を生理学的と、あるいは「生体解剖」（JGB 7.218, KSA5 S.153）と形容する。そして、そのような仕方で道徳を、特に自らの道徳を、捉え直し問い直すことによって、道徳という価値体系の価値評価がなされる、価値の価値付け直しがなされる、と考えられている。

> 私がしたように、心理学を権力への意志の形態論や進化論として捉えること、これに思い掠めた者さえ誰もなかった。（略）本来の生理－心理学は、研究者の胸中の無意識的な抵抗と戦わなければならない。つまり自らに敵対する心胸を持つことだ。（略）心理学は今や再

4　血肉化（einverleiben, Einverleibung）という語で表現されるのが、そのような身体の形成である。この語はJGB 7.230（KSA5 S.167）、9.259（S.207）、GM II.1（S.291）などに見られる。

び根本問題に至る道となる。（JGB 1.23, KSA5 S.38f.）

また、身体が決して日常的な意味での身体のみを指すのではなく、キリスト教道徳を、あるいは日本語や数学やニーチェ思想を、人々の身体をなすものとして捉えるならば、そこでは、いわゆる個人の限界と一致するような身体が考えられているのではないということになる。キリスト教道徳はニーチェ一人の、彼だけの身体ではなく、彼が同胞と共有する身体であり、キリスト教道徳とは彼らの身体なのである。日本語や数学が我々の舌や目に、身体になっていると言う時、その舌や目は決して私が私一人で他人と無関係に独立的にもっているような私一人のものではなく、貴方一人のものではなく、同じ舌を、目を、我々はもっているのだ。

ニーチェは道徳を批判するのだが、その批判は、道徳一般の問題性にと言うよりも、彼の・彼らの道徳としてのキリスト教道徳に、それに潜む問題性に対して向けられていたと言える。自分が、自分たちがどのような危険に直面しているのか、自分たちはどのような者なのか、これを問うことが彼にとっては焦眉の課題だった。その時に、彼はキリスト教道徳の核心にある同情（Mitleid）を批判する。その際の語調の激烈さは『反キリスト者』などに明らかに見て取れる。

更に、『道徳の系譜』はその表題から明らかに道徳を批判の主たる対象とするものではあるのだが、そこでの道徳批判は学問批判へと接続される。最終論文の最後の数節が学問つまり科学、特に近代科学を取り上げるのは、近代科学の内的衝動がキリスト教信仰のもとでこそ培われた真理への意志であることを、近代科学が神的な真理の信仰をキリスト教と共有すると、ニーチェが洞察するからである。『善悪の彼岸』が真理についての言及から始まるのも同じ理由からである。この書は副題を「未来の哲学の序曲」としている。ニーチェは道徳と学問の、必ずしも顕在的とは言えない結びつきを示して見せる。（近代）科学は、それほど、それ自体が思っているほど、価値中立的な眼差しで世界を見てはいないということを示すのだ。

２　自然主義からのニーチェ批判

フットは、その主著と言える『人間にとって善とは何か（*Natural Goodness*）』の最終章で、ニーチェの道徳批判を論じる。現在、倫理学の教科書的な理解では、規範理論には三つの主要な類型があり、それは功利主義と義務論と徳倫理学であるとされる。この中で、フットは徳倫理学的な思想家であるとされる[5]。

フットは、メタ倫理学の立場としては自然主義に立ち、アリストテレス的な自然の理解から善を、人間という生物種にとっての善として捉える[6]。そこで考えられている人間とは理性的動物と

---

[5] 彼女自身は、徳倫理学という語がキリスト教的な、特にカトリック的な徳倫理を想起させることもあり、自らの立場をそのようには表現していなかったとされる。ニーチェは、前節に引用した部分（JGB 9.262）などにも見られるように、しばしば徳という語を用いる。しかし、ニーチェの記述にこの語が現れる際、その意味するところは決してキリスト教的なものではなく、むしろ古典文献学者ニーチェはこれをギリシア的な意味で使っていたと言える。

[6] 自然主義と徳倫理学的観点つまり徳という人間の性格への注目との接続は、自然主義や現代の徳倫理学の特徴と言うよりフットの独自性である。

しての人間である。道徳的な善悪とは「生き物における自然的な善さと欠陥（natural goodness and defect in living things）」（Foot p.3）であるとする、彼女のそのような自然主義は、R.M. ヘアの普遍的指令主義に代表されるような立場に対し、事実判断と価値判断の結びつきの問題に、価値判断を主観的なものに還元し事実判断と断絶させることの問題に対して、規範的価値・倫理的価値の客観的妥当性を説明するべく展開された。

フットの自然主義では、道徳的な価値としての善悪は、人間が如何なるものであるか、人間という種の生のあり方（life）、人間の自然本性という客観的な事実から定まる。どのようなものが人間の良い性質・性格としての徳であるか、そしてそういったものが善いということは、決して主観的なだけのものではない。

> 道徳的議論を根拠づけるものは、究極的には、人間の生についての事実である（略）。我々自身の種の生のあり方（the life form）に基づいて、客観的で事実的な評価があることも明らかである。ではどうして、こう考えるのは奇怪なことだろうか？　人間の意志についての評価は人間の自然本性と我々自身の種の生のあり方とに関わる事実によって決定されるべきだと。（Foot p.24）

フットは、善悪という価値評価を他の価値評価と異なる特別なものとしても、人間だけのものとも考えず、どのような生き物であっても同様に・平行に考えられるものであり、その生物種の生のあり方すなわち自然から決定されるものとする。その際、彼女が自然という語によって指すのは、いわゆる物理的自然でも近代科学的な自然でもない。蜂がダンスをし、鳥が巣を作り、狼が群れで狩りをする、こういったことはそれぞれの種の特性であり、これらのことをするのはそれぞれの種に属するものがそれとして生きるのに不可欠である。たとえ、時にこれらの種に属するいずれかの一個体がこういったことをしないことが事実として観察されるとしても、そのことはその個体がその種に属さないということにも、その性質がその種を特徴付けるものではないということにもならない。そのような、蜂を蜂たらしめ蜂としての生を個々の蜂に可能にさせている特性、蜂を蜂として示す特徴、フットによって考えられている自然とはそのような意味でのものである。蜂がダンスをしないことや、鳥が巣を作らないこと、狼が一匹でいることは、それぞれの種の生の形からして欠陥であるということになる。このような意味での自然的欠陥と同様に、人間にとっての道徳的悪が捉えられる。

この書におけるニーチェ批判は三つの点からなされている[7]。ニーチェの自由意志の否定について、キリスト教道徳ひいてはその核にある同情への批判について、そしてそれ自体としての善悪があることの否定について、である。

一つ目については、ニーチェが、自由意志の否定から行為の意志と行為の責任の間の結びつき

---

[7] その三点は、ニーチェの主張を反道徳主義（immoralism）と呼びうる三つの区別されるべき見解として挙げられる。反道徳主義という語はこの最終章の章題となっているものであり、フットのニーチェ批判は反道徳主義に対する批判として展開される。

を解体し、いわゆる同情道徳だけでなく道徳自体を問題化しようとしていることが述べられる。しかしフットは、ニーチェの道徳批判のこの点には長くは留まらない。彼女のニーチェ批判の重点は後の二つの点にある。

ニーチェは同情を生を否定するものだと言うが、そのような主張に対して、「慈善（charity）の徳とされていることについてニーチェが否定しているのは、人間にとっての善が或る性格上の特性に徳としての身分を与えるという関係にあることに他ならない」（Foot p.107）と述べられる。同情が時に、ニーチェが述べるような、それを抱く者の弱さの徴であることもありうると認めつつ、しかしフットは、我々の日常的・現実的な同情の体験を想起させ、例えば被災者への支援の動機となる同情や、全く不条理な暴力や迫害に苦しむ人々への同情を想起させ、ニーチェのような同情の拒否を拒否する。彼女の挙げるようなソヴィエトやナチス・ドイツ、チリ、カンボジア、ルワンダで実際に起こったことを我々は知っているが、そういった人々に対して一片の同情も、ニーチェ的な同情の拒否に従って、抱かずにいられるのか、ということだ。

> 我々のなかに貪欲で嫉妬深い子供がずっと住んでいることを認めつつ、同時に、それでも本当の親切心（kindness）は存在すると主張することは不可能なことだろうか？　可能だとすれば、自然的規範性の規準に従えば、徳として慈善が第一候補になる。というのも、愛や親切心のその他の形は、不幸に襲われた時に我々の誰もが必要とするものであり、我々を気の毒に思ってくれる人においては弱さよりむしろ強さの徴でありうるからだ。（Foot p.108）

人間にとっての善さ、人間としての善さ、人間の望ましい性質というものがあるとすれば、それは同情（pity）という性質・傾向性である、フットはそのように主張する。

そしてフットは、ニーチェがどのような行為であれ端的に善い・悪い行為というものはない、善悪それ自体というものはない、とすることを「さらにいまわしい（more sinister）見解」（Foot p.110）と形容する[8]。ニーチェの描く生のあり方、つまり権力への意志としての、その本質的な活動が他のものへの抑圧であり搾取であり暴力であるような、野生の動物同士の関係のように描かれ、高度に複雑な個体から微生物に至るまでの生物に、またその身体の器官や細胞の関係・機能にも類比的な捉え方は、人間を捉えるには、「不当な同一視（illicit identification）」（ibd.）であり、ニーチェ的な生理学や系譜学、また根本原理としての権力への意志説はいずれも「非常に疑わしい約束手形（the highly dubious suggestion）」（Foot p.112）であると言う。

このようなニーチェへの批判と評価はどのように読むのが有意義だろうか。同情は人間種にとっての自然的な善と位置付けることができるとフットは考える。他方、ニーチェは同情を拒否

[8] 『道徳の系譜』第二論文第 11 節の記述を引用した上でこのように述べられる。

する。彼はキリスト教の核心にある同情を、羞恥の無さ（gebrechen an Scham）[9]と考える。ニーチェが同情に辛辣な言葉を向ける時、それは我々にとって日常的な同情よりもむしろキリスト教的な同情、神と人間との関係における同情に対して向けられ、また、その同情は羞恥との関連から批判されるという点は考えられる必要があるだろう。羞恥には、見ること・明かされることで覚える羞恥と見られること・明かすことで覚える羞恥とがある。見てしまったという羞恥は、見られるものの見られたくなさに配慮するからこそ見た時・見られた時に生じるのであり、見られてしまったという羞恥は、見られるものが見られたくなさをもつがゆえに見た時・見られた時に生じる。羞恥を知る者は見られまいとし、見るまいとする。羞恥に欠ける同情とは、全てを見尽くしあからさまにしようとする不躾な眼差しなのである。同情されたいと思う者はいないと言えるなら、それは、同情されることで同情された者があからさまにされるから、自分自身を見られ、特に自らの苦しみを見られ、見られることの耐え難さを侵害されるからである。このような意味での、羞恥の無さとしての同情への批判は、全てを見尽くすことの価値に対する疑義となる。神は一切を見そなわし、人はその眼差しの前に己の全てを見せる。そのようなあり方に、そのような剥き出しの真理に、高い価値がこれまでは置かれていたが、そのような価値はあるいは……？という疑問符である。

我々の日常的な感覚からすれば、そしておそらくフットにとっても、同情的な共感にこそ人間的な倫理性の根拠を見、社会的存在としての人間同士の連帯の基礎を求めることは、まったく妥当で当然のことと思われる。ニーチェの同情論はそのような我々のごく普通の心性に障る。だがニーチェは決して、友人や友情について語っていないわけではない。ニーチェ思想における友情論については残念ながら本稿では詳述することはできないが、彼の同情の拒否は必ずしも人間同士の連帯をも否定し非難するものではない。

また、ニーチェがそれ自体として悪い行為はないと語ることに、その思想においては大量虐殺のような明らかな悪をそれ自体としての悪と断じることができないという危険をフットはいまわしいものとして見て取るのだが、そもそもニーチェはそれ自体というものに対して懐疑的である。『善悪の彼岸』で展開される学問批判にはその懐疑が表れている。真理自体、女自体、善自体、等々、人がそう言い出すのには、そういったもの、つまりそれ自体としてあるもの、魂、主体、永遠不変の本質、自己同一的なもの、一貫性、等々についての、仮構されたそういったものへの、弱さからの信仰がある、とニーチェは見ているのである。それ自体としてあるものの問題は同情の問題に連続している。それらはいずれもキリスト教批判に含まれ、その信仰のもとでそれによって

---

9 『ツァラトゥストラ』では神の死が二様に語られるが、これらはキリスト教の核心にある同情について語るものと読むことができる。神は人間への同情によって死んだと、悪魔が言うのをツァラトゥストラは聴く（Z II. Von den Mitleidigen, KSA4 S.115）。そして彼はまた、最も醜い者が、自分が神を殺したと言うのを聴く（Z IV. Der hässlichste Mensch, KSA4 S.327）。神は人間を見て同情した（そして死んだ）のだが、この同情には羞恥が欠けている。全てを見そなわす神は見られたくなさを抱える人間の羞恥に配慮などせず、最も醜い者はいつも徹底的に隅々まで神に見られたために、その目撃者に復讐したと言う。同情による神の死と最も醜い者による神の殺害とは羞恥を巡る事件である。全てを見尽くす神は見る者の羞恥の無さゆえに死に、誰にも決して見られたくないと思うほどに醜い者は見られた羞恥のゆえに見た神に復讐した。『ツァラトゥストラ』で語られる神の死とはこのような事件である。

生きてきた人間の弱さの徴として分析される。それ自体というものに対するニーチェの批判からすれば驚くほど率直に、フットはそれ自体としての善悪を、生・自然から定まる善や悪を考えているように思われる。

我々の普通の感覚が端的な悪と捉えるであろう様々な事柄・出来事を正当化するためにニーチェ的な諸概念・理論が「悪用」されうる、現にナチス・ドイツがニーチェ思想と関係を持ったように、そのことはニーチェ思想の危険性ではあるだろうが、欠点でもある・あらざるをえないのだろうか。おそらくそうではなく、その点は、ニーチェの思想や記述から我々がより多くのものを引き出しうる可能性を示すところではないだろうか。

３　フットの言う「生」とニーチェの言う「生」

前節に見たように、フットはニーチェを批判し、いくつかの点でニーチェとは根本的に異なる立場に立つと考えているように思われる。だがフットの自然主義的な道徳論は、彼女自身が考えるよりも、彼女自身が考えるのとは違うところで、ニーチェの道徳論に漸近的である。

フットは、善悪という価値評価は人間という種の生のあり方から、自然から決定されるとする。ニーチェは、道徳はそれによって生きる者の生存条件を示しているとする。ともに生と道徳の密接で不可分の関係を考える両者の相違は、フットが人間の生・自然を他の生物や動物種との連続性や、系譜と言われるような歴史的・時間的連続性の内では捉えないという点にある。いつかどこかの段階で猿が人になったのだとしても、人であるものはそれ自体として人であると考えられている。ただし、他方ニーチェが考える系譜としての連続性とは、起源から直線的・単線的に現在まで至るようなものではなく、現在から振り返って繙れ紡がれる過去との結びつきである。我々人間は現に人間として生きることで人間を、人間の自然を知っている、たとえ完璧に、完全に、誤りなく知り尽くしているのではなくとも。蜂にとっての善さと人間にとっての善さは、それぞれの生から同様の仕方で決定される。そのように、善さの構造は人間にも他の生き物にも平行的であるとフットは考える。しかし、人間も他の生き物も全てを権力への意志という概念によって一元的に、類比的に捉えることは不当であるとされる。生を権力への意志として捉え、そのように描くことは正しくない。フットがニーチェに対して批判しているのは、権力への意志としての生という、生についての事実認識の誤りであるということになる。

人間の生から善悪という道徳的価値は決定される。前節の初めに見たようにフットは表出主義を批判し自然主義に立つのだが、表出主義批判は、ニーチェ批判としては、遠近法主義に関する批判となるとしばしば考えられる。つまりニーチェの道徳論は主観主義と見なされることがある[10]。しかしフットのニーチェ批判が、この意味での表出主義批判となっているとは必ずしも言えない。生存条件を示すものとしての道徳という位置付けや、ニーチェ的な身体概念から理解される道徳・諸道徳とは、確かに遠近法的であり、異なる遠近法があるとは、見る者がそれぞれ固有の歴史を反映する身体において・身体によって見ているということである。だが、この身体は

[10]　フットの邦訳書の監訳者による解説にも、そのようなニーチェの道徳論の解釈が述べられている。

必ずしも個人の、主観と一致するような意味での個人のものではない。ニーチェが道徳を論じる際に焦点とするのは、決して個々人のそれぞれの道徳的感情や、様々な場面でのその都度の行為の道徳的評価ではないのだ。

フットの抱く権力への意志という概念への疑念は、彼女が同情に自然的に良い・善い傾向性という位置付けを与えることにも繋がっている。そこには彼女の理解する人間の自然、人間の事実がある。20 世紀の世界各地で起こった多くの現実の惨事を、また 21 世紀にも無くなっていない人の手で実行された残酷さを、確かに現在の我々は肯定しないし、おそらくできない（するべきではない）。その事実からフットは同情を善いものとして肯定する。しかし彼女が語ることは必ずしも、ニーチェ思想に含まれるものと対立はしないように思われる。彼女の考える人間とは、ポリス的動物としての、他者との関係や連帯を自らの生存に不可欠のものとする社会的存在としての人間たちであろう。人間という種は、決して単に動物学的・生物的側面からだけでなく、その社会性やそれぞれの文化や固有の歴史をもそのものとしてあるのに不可欠のものとして備えた存在として捉えられている。人間同士の関係、人間の生存をそれとして成立させる諸関係を結ばせるものは相手に対する同情であると、フットは考えているようだが、ニーチェが問題とする同情とは、神と人間との関係においてその本質が問われるような同情である。同情とは違う言葉で、フットが人間を人間たらしめるものとして考える人間同士の結びつきは、ニーチェ思想においてその位置を占めている。

フットとニーチェはもう一つ、徳倫理学という点でも通ずるところがある。知恵あるいは思慮は伝統的な徳目である。フットは徳という人間の性質を、「それらをもっている人を立派に行為するようにさせる」（Foot p.12）ものであると表現する。徳倫理学で論じられるような行為に関わる・行為を導く思慮、何がするべきことであるのかを知る或る種の知性には、事実認識をする知性と異なるところがある。フットの場合、それは実践的合理性（practical rationality）と呼ばれる。人が何かをしようとしてする時、その人は何をするべきかが解っていて、その行為の意味を自分の意図として解っていて、それをする。有徳な人のもつその人自らの行為についての知は、一般的規則についてのものではなく、自身が如何なる者であるかと自身が置かれた状況・場面に応じて得られるものであり、その人の徳はその人に、その人のなすべきこと・あるべきあり方を教える。このような徳倫理学で論じられる思慮は、生の学としてニーチェが考える哲学、それをするための能力としての知恵が如何なるものか、これをより具体的に捉えるのに豊かな示唆を与えるのではないだろうか。

おわりに

本稿ではフットのニーチェ批判から、二人の道徳についての議論がどこで接近し、どこですれ違うのかを検討した。二人の考える生と道徳との結びつきは互いに限りなく近いものに見える。だがその生について、生がニーチェによって権力への意志として描かれる時に強調される苛烈さにフットは否定的である。その否定的な眼差しは、同情に人間の自然的な善を見出し、この世には端的な悪と呼ぶべきものがあることを見て取る。

人間は、我々は、我々自身である生は、如何なるものか？　そして我々はそれをどのようにして知るのか？　フットは人間の自然として、ニーチェは権力への意志として、これを捉えた。知恵とはこの、生を知る能力と言えよう。それは我々に我々自身を教え、それによって我々は己のなすべきことをし、自分自身になる。知恵は我々の生き方に深く関わる。二人の思想における知恵・思慮についての更なる検討は今後の課題としたい。

（いくしまひろこ　大阪大学・非常勤講師）

Was lehrt die Tugend der Weisheit?
Nietzsches Moralkritik und die Tugendethik

Hiroko IKUSHIMA

Philippa Foot kritisiert Nietzsches Moralkritik im letzten Kapitel Immoralism ihres Hauptwerkes *Natural Goodness*.

Für Nietzsche sind die Moralen die Zeugnisse des Lebens. Darin sind die Lebensbedingungen ausgedrückt, d. h. wie die Menschen leben müssen. Der Leib im Sinne Nietzsches ist die Verkörperung des Lebens als Wille zur Macht. Daher nennt er seine Genealogie der Moral die Physiologie, Psychologie oder Vivisektion.

Auf dem Standpunkt des Naturalismus führt Foot aus, nach ihrer Meinung wird der moralische Wert nach der menschlichen Natur bestimmt, d.h. das moralische Gut ist das natürliche Gut und das moralische Böse ist der natürliche Mangel. Das ist gleich in bezug auf alle Lebewesen, nicht nur Menschen auch alles andere.

Foot kritisiert Nietzsche als Immoralist auf den folgenden drei Punkten, d.h. Verneinungen vom freie Willen, Mitleid und Gut und Böse an sich. Nach ihrer Meinung ist das Mitleid (pity) das naturalistische Gut des Menschen.

Nietzsche kritisiert das Mitleid in der Beziehung des Menschen zum Gott, das ist an Scham gebrechen. Im Glaube an An-sich liegt das gleiche Glaube an die Hochschätzung des Mitleids. Er hält es für fragwürdig.

Foot und Nietzsche, sie scheinen das ähnliche Gedanke zu haben in bezug auf die Verbindung zwischen Leben und Moral. Aber die Differenz tritt davon auf, wie man das menschlische Leben begrifft oder begreiffen muss.

「キーワード」
身体、近代科学、自然主義、同情、羞恥